

障害のある子どもの自立や社会参加に向けて指導・支援を行う特別支援教育。札幌学院大の二通諭准教授(60)が出版した「映画で学ぶ特別支援教育」(全障研出版部刊)は、国内外の映画作品に登場する人物の障害と、描かれ

た社会環境や人間関係による影響を独自に分析し、どう対処すべきだったのかななどを考察。特別支援教育のあり方を考える上で映画が役立つことを示した、ユニークな一冊だ。

(弓場敬夫)

映画から学ぶ 特別支援教育

札幌学院大・二通諭准教授が出版



著書「映画で学ぶ特別支援教育」を手にする二通諭さん

二通さんは道教大札幌校を卒業後、小中学校で障害児教育に取り組んだ。その傍ら、学生時代から映画館に通い続け、作品の中で描かれる発達・知的・精神・身体などの障害者の様子や、置かれた環境について

独自の視点で考察、分析する作業を重ねてきた。2000年には北海道新聞生活面で連載「スクリーンの障害者」も執筆している。「映画で学ぶ特別支援教育」は今月発刊し、書き下ろしを中心に、雑誌「総合リハビリテーション」(医学書院)に掲載したコラムも盛り込んだ。取り上げた映画は日韓欧米の50作品余り。注意欠陥多動性障害(AHDH)、自閉症、高次脳機能障害など、作品で描かれた状態ごとに章立てしている。

障害や社会環境を分析／どう対処すべきか考察

取り上げた作品の例を紹介すると。

■「イン・ハー・シューズ」(米国、05年)

美人だが音読や片付けができない主人公マギーと、有能な弁護士ながら体形にコンプレックスを持つ姉ロース。マギーがロースの恋人にちよっかいを出したことで、二人の関係は崩れる。だが、マギーが祖母のもとへ押しかけ、さまざまなたとの出会いをきっかけに人生が好転する—という筋書き。

あり方を問いかける。

二通さんは失踪した母親に着目し、「発達障害の性質をもつていながら、そのことに気付かなかった人かもしれない」と推定。「母親」けい子のパーソナリティーに由来する(置き去りにされた)子どもたちの悲劇も、けい子の周囲にコントロールタワーになるような支援者がいたなら抑止できたであろう」として、児童虐待の一種「ネグレクト(放置)」を防ぐ方法を考える上で重要な点を掲げる。

二通さんはマギーについて「LD(学習障害)とAHDH(注意欠陥多動性障害)が合わさったタイプ」と分析。「良いところを思いきりほめてもらうことによって(中略)大飛躍につながるのです。安心・安全と居場所、自己肯定感が確保されました」とし、理解ある人との出会いがマギーの意欲を引き出すことにつながった、との見方を示す。

■「誰も知らない」(是枝裕和監督、04年)

実際に起きた子ども置き去り事件を題材とした作品。母親が失踪した後、幼い弟妹の面倒を見る長男の目を通して、家族や社会の

障害者問題を専門とする二通さんは、特別支援教育を担う人々には障害者に対する「温かいハート(心)」が必要だというのが持論。その上で「映画はそうしたハート形成の大きな材料になる」とも訴える。

「映画で学ぶ特別支援教育」では、序章の注釈メモ部分で特別支援教育制度について説明しているほか、巻末部分に214作品を著者が障害や疾病ごとに分類した「見たことのある映画チェック表」が付き、観賞する際の参考になる。A5判、143頁。1785円。